

審査の結果の要旨

氏名 金 暲和

本論文「ケータイのかくれた次元：モバイル・メディアをめぐる解釈的メディア論」は、文化人類学のパースペクティブをメディア論に持ち込み、日常生活の中で人々がモバイル・メディア（ケータイ）をどのように使用し、意味づけ、文化の一部としてとらえているかをあきらかにすること、そしてそのためにワークショップを用いた新たなエスノグラフィの方法論（「ケータイ・ストーリーテリング」と「ケータイのパフォーマンス・エスノグラフィ」）を提示することを目的としている。

■構成と概要

論文は全 8 章からなっており、問題意識、先行研究の系譜、研究視座を明らかにした序章、総括をおこなった終章を除く 6 章分は、「第 1 部 ケータイ言説の地層」「第 2 部 ケータイの解釈的メディア論」「第 3 部 語られるケータイ・演じられるケータイ」の 3 部に分けられ、構成されている。

第 1 部では、ケータイを取りまく日本の言説のありようがいかにアンバランスな状況にあるかを論じられている。すなわち第 1 章では用語の定義などをめぐる議論の後、産業技術的な言説について、第 2 章では、それとは対比的な使用者のフォークロア的な言説について明らかにされている。そのうえで、これまで見落とされがちだったフォークロア的な言説の意義を再評価し、ケータイの「使用者の営み」をあきらかにすることの重要性が強調されている。

第 2 部では、本論文の理論的枠組みが提示されている。第 3 章では文化人類学、カルチュラル・スタディーズなどを参照しつつ文化概念が検討され、ケータイの解釈的メディア論という枠組みと、「基礎文化」という操作的概念が提示されている。第 4 章では文化人類学の知見から解釈的視座とパフォーマンス概念が導入され、ワークショップを用いたパフォーマンス・エスノグラフィの有効性が説かれている。

第 3 部では、第 4 章に基づいた 2 つのワークショップ実践とその知見が記述されている。第 5 章では、人々が自分のケータイについての傷、汚れをめぐって

抱いている思い出や、メールや写真等にまつわって生み出したプライベートな物語などを浮き彫りにするための「ケータイ・ストーリーテリング」ワークショップの企画、実施、そしてそこから得られた知見が論じられている。第6章では、ケータイに関わる日常実践を身体的に演じてもらう「ケータイのパフォーマンス・エスノグラフィ」の企画、実施、そしてそこから得られた知見が論じられている。

繰り返しいえば終章では全体が総括されるとともに、ケータイの「使用者の営み」が位置する「基礎文化」、すなわち「ケータイのかくれた次元」の概要があらためて浮き彫りにされると同時に、本論が試みたワークショップ型の研究法が持つ可能性と課題が示されている。

■評価と議論

最終審査会での評価、および議論は次のようにまとめられる。

(1) これまでのケータイをめぐる諸研究の多くが、技術革新に引きずられた、いわば技術中心主義的なパースペクティブに基づいて進められてきたために、ケータイの日常的使用状況や文化を扱うといってもおもに通信手段としての側面ばかりに着目しがちだった。それらの知見は結果として、技術が新しくなれば変化していく、メディアと人間の関係性において比較的表層的なことがらだったといえる。それに対してこの研究は、1990年代後半から日本で発達した「ケータイ学」の志を批判的に受け継ぎつつ、人々の日常生活実践に潜み、日ごろはほとんど意識されることがないケータイのモノやコトとしての意味合い、使用者のアイデンティティとの関連性、身体や空間との相関など、いわゆる「かくれた次元」(E・T・ホール)を明らかにしようと試みている。その問題意識と意欲は高く評価された。

(2) ケータイ、およびモバイル・メディアをめぐる内外の先行研究を十分に渉猟しており、特に日本で展開されてきた「ケータイ学」の可能性と課題を多角的に検討している。またメディア論と文化人類学を架橋する学問的、方法論的意識を備えており、さらにパフォーマンス・エスノグラフィという新たな領域を開拓しようとする研究の構図にも先進性が認められる。

(3) ワークショップの設計、および評価分析について十分な吟味がなされているとはいえない。そのため、「ケータイのかくれた次元」をあきらかにするための方法論としてワークショップが、エスノメソロジーなど他の方法論に較べてどれだけ有効なのか、その特性が何なのかがはっきりしない。

(4) ケータイをめぐる産業技術的な営みがどのようなものであるかについての分析や記述がほとんどないまま、「技術的営み」と「使用者の営み」が二項対立的にとらえられてしまっている。結果としてケータイをめぐる諸実践のとら

えかたが単純、かつ平板である。

(5)「動態としてのケータイ」をとらえたいとしているが、本研究はケータイの「基礎文化」に焦点をあてている。普遍性を伴うとされる「基礎文化」とは、すなわち「静態としてのケータイ」の側面を指している。文化概念と日常生活実践、ワークショップ実践の関わりをより深く検討すべきであった。

以上のような指摘があったが、金暲和がそれらの課題をおおむねしっかりと認識しており、本論は全体としてモバイル・メディア研究がかかえる諸問題を一手に引き受けようとするような深い問題意識と、言説分析、理論検討、ワークショップ実践を総合しようとするスケールの大きさを備えており、メディア論、メディア人類学などの領域に貢献しうる水準にあると判断した。

よって本論文は博士(学際情報学)の学位請求論文として合格と認められる。

